

コロナ禍のもとで、中学生たちは

東京公立中学校教員

1. 中学校1年生の副担任として見た子どもたちの様子

- ・ 6年生としての締めくくりができなかった子どもたち
- ・ 6月からようやく分散登校。本校は男女でクラスを分けて、午前または午後に登校。体育の授業の都合による男女別。
男子たちの様子…他の小学校から来た子どもと、なかなか交われない。
緊張感が高く、給食（教員が配膳）がのどを通らない子ども。
女子たちの様子…緊張感は高いが、他の小学校から来た子どもに話しかけようとする様子が、男子より多く見られた。
- ・ 6月最終週から、ようやくクラス全員がそろろう。
女子が早くなじもうとするため、男女関係なく、近い席の人にはなしかける。男子同士も話せるようになってくる。

2. 3か月のかかわりの面での立ち遅れ、その後の行事の縮小をどう補うのか

- ・ 組合では、子どもたちに精選した学びを保障し、無理のない生活保障を教育行政に要請。
- ・ 上記に合意していたはずが、だんだんに授業内容を追いつかせることに向かう行政。
- ・ 子どもを育てるために行事は必要と言っていた区の行政も、修学旅行、移動教室等中止決定。1学期に運動会は実施できず。
- ・ 行事の中止がもたらしたこと。
 - 1、リーダーたちが男女の意見の違いだけでなく、多くの人の意見、考えを尊重し、実施案に反映するように努力する場がない。
 - 2、話し合いにみんなが参加し、みんなで確認したことを実現していくことを、子どもたち一人ひとりが具体的に学ぶ場が少ない。
 - 3、みんなのために子どもたち一人ひとりが最善を尽くして行事に参加し、苦手な子どもをサポートし、その努力を互いに認め合い、ともに成長を確認できる機会がなくなる。日常の学校生活（密を避ける）だけでは、あまりに弱い。
 - 4、実施後に失敗を振り返り、何が原因なのかを考えあい、子どもたち自身が乗り越えるべき集団としての弱点や、次に向かう具体的な目標が見えにくい。
 - 5、これらは、子どもたちだけでなく、教員が多様な視点で子どもを見て、一人ひとりの子どもの成長・発達の課題を見つつ、実践の積み上げを行う面で、大きな弱点となる。
- ・ 行事だけでなく、授業時数確保優先の問題は、総合的な学習の時間を授業に振り替えたりするなど、ただでさえ立ち遅れていたジェンダー平等の学びがさらに奪われる。何とか補いたい。

3. ジェンダー平等の学習の意義と本校1学年の取り組み

- ・ ジェンダー平等の学習は、究極の人権についての学び。学校の中では男女に分かれて取り組むことや、男女別に管理することが多く、子どもたちはいやおうなしに性差を意識することになる。
- ・ 学年の教員が、日常的に、性差を意識させない努力をする（学年主任と合意し、学年全体で）
 - 1、 座席表を男女別で色分けしない。
 - 2、 子どもたち全員を「さん」付けて呼ぶ。
 - 3、 総合的な学習の小学習集団（3～4人）の学習テーマに、「ジェンダー平等」を入れる。
学習の流れ： 学級ごとにテーマを割り振る（地球温暖化や貧困・孤独死など現代的な課題）
テーマごとに一人ひとりが調べ学習を進める（夏休みを含めて）。
同じテーマの人が集まり、議論しながら発表準備を進める。
学級内で発表会后、学級代表グループが1年生全員の前で発表する。
※この時に、調べたいテーマごとにグループを作り、男女別や気の合う者同士などのグループづくりはしなかった。今後、このやり方でのグループづくりを行う。集団でのテーマ別学習の期間は、7月から10月の発表会まで、少しずつ進めた。
- 4、 「性の多様性を学ぶ」道徳の授業の実施（下に資料1を付けました）
- 5、 なかなか実施できなかった運動会を、10月に実施。自立の遅れが目立ったり、仲間と協力したりすることが苦手だった子どもたちが、大きく成長する機会となった。（資料2を付けました）
- 6、 校外学習の班づくりも、学習班（2～3人）で行う。
普段あまり話さないようなペアもできるが、関係性の深まりにつながる。

4. 子どもたちの保護者の生活と思い、子どもに見られる影響

- ・ 三者面談の受付を、吹きさらしの玄関でしていたときの、ある保護者のことば。
「先生、寒くて大変ね。でも、先生はお給料いっぱいもらっているものね」
「働けるところがあるのが一番だよね」
- ・ 保護者の生活の厳しさが子どもたちに影響を及ぼしていると思われる事例
何人かの事例を口頭でお伝えします。
 - （1） 女子の事例…母親は男子には自分の困難さをあまり伝えないが、女子には結構話している様子。それを受け止めきれず、ストレスになっている子どももいるようだ。
 - （2） 男子の事例…担任の教員の後追いをするかのような、不安定な様子が見られる。※「人間と教育」108号の杉田論文によると、コロナ禍の下で、保護者の生活がますます厳しいものになり、子どもたちも追い詰められていくと思われる。子どもたちに寄り添いたい。

資料1： 子どもたちに性の多様性を学ばせる道徳の授業

1学期の終わり、まだ緊張感が高い生徒たちに、学年主任が合同道徳で性の多様性の授業を行った。

夏休み直前の授業であったため、2学期最初の学年通信で、授業の振り返りを行う。それとともに、実名で感想を載せ、お互いの思いを交流する。(ここでは番号と、表面上の性別を載せてみました)

1 学年合同道徳 (学年通信にまとめとして載せたもの)

8月5日に、1年生全員で合同道徳を行いました。テーマは「性の多様性について」で、E先生が授業をしました。性の多様性について考えることは、人権を守るために大切なことです。

授業は、多くの映像による資料を使い、とても興味深く進められました。

男性と女性だけではない、さまざまな性がある

E先生は、まず、2枚のアライグマの絵を見せて、「このアライグマの性別は何でしょう」と、あなたたちに問いかけました。①のアライグマはきりっとした制服に身を包み、バスを運転しています。②は、リボンを頭に付け、花束を抱えています。

この後、「あなたの性は何で決められてきましたか？」と問いかけられると、みんなはちょっとザワザワ。一人の人が指名されましたが、「ちょっと、何と言ったらいいか…。言いにくいです」という返事です。E先生は、「あるものがついていないか、ついていないかということで、男性、女性と決められるのではないかな？」という説明にもちょっとざわつきました。確かに、今皆さんは、どちらかの性とされていますよね。

E先生は、性はもっと多様なものですよと、いくつかの例を挙げました。

- 1、体の性…体の状況からみる性。
- 2、心の性…自分自身の性別をどう思うかという性。
- 3、好きになる性…どんな性別の人を好きになるかという性。
- 4、表現する性…メイクや服装などの好み。

また、LGBT(Q)と頭文字を取って、性の多様性を表現することもあるけれど、もっと多様で、27種類もあるという説や、そもそも性の枠組みにあてはまらない人もいと説明されました。これらのセクシャルマイノリティ(性の少数派)の人たちは、13人1人ぐらいの割合でいるということですから、割合からすると、1年生みんなの中にも6人程度、少数派の人がいて、もしかすると悩んでいることがあるかもしれません。これはあくまでも割合からみたらという話ですから、だれがどうか?などと話題にすることは間違いですね。

カミングアウトができれば

このあと、自分の性に違和感をおぼえながらずっと生きてきたそうしさんという大学生が、お母さんにカミングアウト(言えないでいたことを言う)したという映像を見ました。

お母さんはそうしさんの話を受け止め、「もっと小さなときに言ってくれたら、ずっと一緒に悩めたのに」と言います。そうしさんはお母さんの答えから、わかってくれないと自分で決めつけてしまうのではなく、会話を重ねていくことが大事だと気付きます。

映像を見た後E先生は、「誰かが自分を信頼してカミングアウトしてくれたら、それを他人に言うことは、絶対にしてはいけないことだ」と強く言いました。確かにその人の立場に立ったら、勇気を奮ってカミングアウトしたのに、不用意にそれを広められたら、何も信用できなくなるし、これからどうしていい

のかもわからなくなりますね。

自分の心の中の差別意識に気づこう

みなさんの中にはふざけ半分で、または良く知らないで、こんな言葉を使っている人はいませんか？ホモ・オカマ・レズ・オナベなど。これからの多様性を認めながら生きていく社会の中で、「知らなかった」ではすまされないことと、E先生は強調します。

今では、多くのタレントさんたちが、自分の性の多様性を隠さず出しています。それは、多くの人たちにそういう人がいることを知らせていくために、勇気のあることです。しかし、だからといって、少数者にとって生きやすい世の中になっているかというと、まだまだ差別はなくなっていない。

最初のアライグマのイラストに戻り、再び先生は、「リボンが女、運転手は男と決めつけなかったか？自分の心の奥底に性に対する決めつけや差別はなかったか、考えてみよう」と問いかけました。

先生は、みんなに歌詞のプリントを配りました。星野源さんの「Family Song」です。いろいろな家族の形があっていい、いろいろな人の幸せにあてはまる歌だと思うと、先生は語ります。みんなは、総合の学習で、世界や日本の状況を調べ、視野を広げてほしい。みんなは様々な人がいるのだということ、差別意識をもたないで生きることの大切さを、当たり前のように理解できるようにならなくては行けないと、授業を結びました。

授業の感想

A組

- 1 (女子) …自分たちにできることは、今の状態をたくさんの人に教えることだと思う。今の時代のやり方で！
- 2 (男子) …「Family Song」やLGBTQの人たちの話を聞いて、自分が一般の人と違うことで否定される悲しさを知りました。
- 3 (男子) …いろいろな性の在り方があるということが分かった。今までは体の性で性別を判断していたけれど、心の性などでも判断したいです。
- 4 (男子) …一人ひとりがセクシュアリティの理解を深め、分かり合うことによって、差別がなくなると思う。また、今回の授業でセクシュアリティについてよくわかった。
- 5 (女子) …差別があることによって人間が生きにくい生活になりゆくので、個性を大事にする。
- 6 (女子) …見た目や言動だけで決めつけず、相手のことをわかるようにする。
- 7 (女子) …見た目だけで「この人は男、この人は女と決めつけて、話や関係を進めてはいけないと思うから、「性の多様性」を知ることが大切だと思う。

B組

- 8 (女子) …人は人だから、同性カップルや、女の格好の男の人がいても、笑ったり差別したりしない。27種類も性別があるとは思わなかった。
- 9 (女子) …性など考えたことないし、知らなくて、LGBTQの人のことを変と思っていた。でも、今日いろんなことを知ったから、これからは笑ったりせず、受け入れられるようにする。
- 10 (女子) …見た目で判断せず、差別しない。授業をして、部活も男女関係なくできたらよいと思った。
- 11 (女子) …これが普通みたいな固定的な考え方をしていたから、いろいろな人がいることが普通なんだ

なあと思った。

12 (男子) …性のことについて馬鹿にしたり笑ったり、そういうことでいじってはいけないので、性について受け入れたり、セクシャルマイノリティの人でも生きやすい国にしていきたい。

13 (男子) …性についての話はあまり出さないで、相手からカミングアウトしてきたら、それを認められるようにする。

C組

14 (男子) …みんなにとっての平和な社会をつくること。

15 (女子) …まずは、多くの人々とLGBTQのことや、そういう「性」に関して認め合う交流をすることが大切で、私たちには交流するという事は、少し難しいかもしれないけれど、理解して認めることはできるんじゃないかなと思いました。今日の授業で、改めて思い込みや差別は良くないことだなと思いました。

16 (女子) …今日の授業を聞いて、改めて世界にはいろんな人がいるということが、考えられた。このことを忘れずに生活していきたい。

17 (女子) …総合のテーマで調べていた時、日本には「男は仕事、女は家事」のイメージが強く根付いていることがわかりました。自分が感じている普通は、人にとっての普通ではないと再確認しました。

18 (女子) …日本は今、差別的だと知り、私は自分の周りだけでも差別をなくしたいです。相手がどう思っているかは自由。

19 (女子) …性差別をなくす。同性愛だろうが何だろうが、同じ人間なんだなと思いました。自分が当たり前じゃなくて、みんな同じということを理解する。

20 (女子) …差別するような言葉を言わない。言っている人がいたら注意してやめさせる。このような大事なことをみんなで学べて良かった。差別がない学年になるといいなと思う。

資料2 研究雑誌用にまとめた原稿より (Iの成長について)

中学校一年生のIさんは、私が自立の大切さについて話し、中学校は大人になるための学校などと言うたびに、「僕はおとなにならないよ。子どものままだいいんだ」と言います。体つきも小柄で、男子の列の先頭に並びます。

コロナ禍の中、十月の終わりにやっと運動会ができました。一年生の学年種目は、大玉運びです。二人ペアになって前後で棒を持ち、その上にビニール製の大きなボールを載せて運びます。リレー形式でクラス全員が運び終えたところでゴールです。途中で一度コーンを回り、グラウンドの端まで行ったら、前後の人が入れ替わって戻り、次の人に棒と大玉を渡します。子どもたちは練習するたびに落としてしまう大玉に苦労し、どうやったら大玉を落とさないで運べるか相談しました。あまり話さないクラスの人とも声を掛け合って、うまくいくように真剣そのものです。

練習の様子を窓から見守っていた校長は、「今年はコロナ禍の中でやるんだから、子どもたちに無理させすぎないで、練習はけがのない程度でって俺は言っていたんだよ。

これじゃ、子どもたちはもっとうまくなるように練習したくなるじゃないか」と、心配顔です。私は、「でも先生、コロナ禍でまだよそよそしい面があった子どもたちが、本当にクラスのためにと協力して、団結を実感しているんです。とても関係が深まってきていますよ」と言いました。子どもたちのそうした

成長の様子を、毎年見守っている校長は、「そうか。そういうことは、とても大事なことだね」とつぶやきながら、再び窓の外に目をやりました。

仲間の思いがなかなか理解できないIさん

さて、Iさんのことに戻ります。クラスのみんなが真剣に練習しているときに、Iさんは、毎回ふざけます。ペアを組んでいたOさんは、棒をくるくる回されて、何回も棒を落としてしまい、そのたびに大玉を追いかけます。そのため、Iさんのクラスは二度の練習で、他のクラスに大差をつけられて最下位です。Iさんはそのふざけが楽しくて、クラスの仲間がいくら注意してもやめようとしません。仲良しのOさんではなく、しっかり者の女子と組むことになりました。それが嫌で泣き始めたIさんは、次の授業でもずっとすねていました。

Iさんが新しく組んだ人に叱咤激励され、練習をするうちに、Iさんのクラスはコツをつかみ、他のクラスと並んだ状態で、本番を迎えることができました。

本番では、何とIさんのクラスがその種目で一位となり、Iさんもぐずってみんなに迷惑をかけたことはすっかり忘れ、大喜びでした。

Iさんが作文にこめた仲間への思い

運動会直後の国語の授業で、運動会の描写作文を書きました。運動会で一番心に残った一種目を選び、様子が目に浮かぶように作文を書こうと、子どもたちに呼びかけました。みんな、どの場面を印象的に描こうかと、頭をひねっています。Iさんは、いつもなかなか課題に取り組めないで、作文などは私の隣に来てもらって、「どの種目にする?」「なぜそれを選んだの?」などと話しながら、軌道に乗るまで手伝います。ところが、今回は違いました。みんながまだ考えているうちからどンドン書き始め、原稿用紙2枚の作文を、あっという間に書き上げたのです。以下にその作文を紹介します。

「旗が上がった。次は、僕の出番になった。その瞬間、僕はスタートした。風に吹かれながら、思いっきり走り続けた。もう少しでコーンを回るというところで、僕の手が限界になったけれど、我慢をし、行きはどうか行くことができた。後は帰りだけだと思って、声をかけて、ペアの人と一緒に大玉を持ち上げた。帰りは僕が前で走っていたが、後ろの人と息が合わなくなってしまい、危なく落としそうになったけれど、バランス感覚を思い出しながら走り続けた。クラスみんなに応援されているけれど、大玉を運んでいるので、そのことに必死で、声が僕に届かなかった。それで次の人に渡すとき、少しだけズレてしまい、『やばい』と思ったけれど、次の人が大丈夫という顔をしていたので、ちょっと安心した。僕の出番は終わったので、その後はずっと応援をしていた。僕は、大玉を運んでいるときは、みんなの声が聞こえなかったけれど、みんなには僕が応援している声が届いているかと考えた。みんな必死で走っていた。焦っている人もいたけれど、後からB組やC組に追いつき、その二つのチームを抜かせた。その後も応援を続けてA組が勝った。嬉しかったけれど、まだB組やC組が終わっていないので、応援を続けようと思った。B組とC組もゴールをしたので、みんなゴールしたから、ものすごく嬉しかった。最後まで大玉を頑張ったので、そのことが頭から出ていかなかった。」

長い引用ですが、競技に必死に取り組み、その後は学級、学年全員の頑張りを応援し続けたIさんの思いがこめられています。学年通信に載ったこの作文を、Iさんが何度も読んでいたと、Iさんの担任が報告してくれました。